

第4章 シンポジウムⅠ「新カリキュラムの実践と課題」

今野 農 (法政大学兼任講師)・里見 親幸 (法政大学兼任講師)

菅井 薫 (法政大学兼任講師)・杉長 敬治 (法政大学兼任講師)

田尻 美和子 (法政大学兼任講師)・司会 金山 喜昭 (法政大学教授)

司会 (金山) それでは本日の最初のシンポジウム「新カリキュラムの実践と課題」をこれから行います。先ほどの私の報告において新カリキュラムの実践などについての概要を説明しましたが、これからは担当の先生方から、新カリキュラムで設置された個別の科目を中心に、その授業の内容や受講生の反応、そしてご自身の授業評価といったことについて10分ずつ報告をしていただきます。そのあとに私のほうで報告を少し整理させていただき、そのことを踏まえて議論をしたいと思っております。

なお、きょうのシンポジウムについては、シンポジウムⅠは、本学のカリキュラムの実践について話題になりますが、シンポジウムⅡでは大学全体、あるいは大学院の話も含めた上での学芸員養成についての現状や展望について議論していきたいと思っております。

シンポジウムは、シンポジウムⅡのほうにウエイトを置き、そちらをメインディッシュにしたいと思っております。時間的には予定より少し縮めた形で進行させていただきたいと思っておりますので、ご登壇の先生方、ご協力のほど、よろしくお願ひいたします。

なお大変僭越ではありますが、きょうは先生という呼称はやめて、「さん」と呼ばさせていただきます。そのほうがフロアの皆さん方と対等の関係で意見交換などができると思っております。シンポジウムⅠ、Ⅱについてはそういうことでお許しいただきたいと思っております。

では、今野さんのほうから「博物館資料保存論」についてご報告をお願いいたします。

今野 50周年の記念シンポジウムにお招きいただきまして、ありがとうございます。資料保存論の今野です。それでは、「講義の現状と課題」ということで報告をさせていただきます。

まず①授業の概要ですが(スライド資料 今野農 2~6)、受講対象として私は春学期のみを担当していて、受講者数は50名程度で単位取得者は49名でした。1年次履修者が7割ほどで、「概論」「資料論」は必然的に未履修か履修中の学生が多いということになります。

内容ですが、資料保存に関する多様で広範な分野

を網羅し、各テーマを広く浅く扱うこととしました。序盤は資料を中心にして、材質の種類や劣化要因、調査、修復、取り扱いなどをテーマとして扱っています。中盤にかけては資料の環境管理を中心に、温湿度、有害物質、光、生物、災害といったことを扱います。終盤は史跡等、野外の遺産ということで、歴史的建造物の保護、自然環境の保護というものをテーマとして扱っています。

この間、授業では標準的なテキストの内容を咀嚼して、極力理解できるように努めるということにしています。

本年度は受講生の要望が多かったので、課外授業としてバックヤード見学を実施しました。7月26日(土)、神奈川県立歴史博物館に依頼して、この日はテストと重なってしまったために参加者は5名ほどでしたが、比較的多くの受講生が参加を希望していました。ただし、シラバスに載せていないので評価に含めないことを明言して、強制参加にはしないということで実施しました。

講義の形態は、パワーポイントによる講義が中心です。時間的要件で1テーマあたり90分しか費やせないということ、あとは施設の要件で、講義室であるということ、受講者数が毎回未定であるということ、科目の性質上、資料に即したワークは事前の準備、専門的設備が必要になってしまうので、グループワーク、ディスカッションは行えません。

講義の目標は、最低限の心構えと、各テーマの導入程度の知識を身につけさせることとしました。まず資料を大事に扱う姿勢であるとか、資料を将来に引き継いでいく必要であるとか、資料の種類や館での対策というのは、実際は多様だということに重点を置いて説明しています。

②授業で工夫した点ですが(スライド資料 今野農 7~12)、第1回授業時にアンケートを実施しました。まず目的としては資料保存に関する知識のレベル、講義の関心事項を把握するため。目的の2点目としては、受講生同士で考えていることの共通基盤をつくるためにアンケートを行うこととしました。

アンケート集計結果の概要です(配布資料2 今野

農)。興味を抱いている資料や本講義のテーマのうち、関心のあるものについて問うてみた結果、興味の傾向は比較的分散しています。資料への関心は洋画や考古資料等が高く、講義への関心では修復や歴史的建造物が比較的高率を示していました。

その他に博物館での資料保存の取り組みについて知っていることを問うたのですが、1年の履修者が多いということで無答数が多かったので、講義の水準は初めての人に合わせることにしました。受講生の記述内容は講義で扱うものに集中していましたので、ピントがずれている受講生は余りありませんでした。それでも、学年や学科を問わず、レベルにはやや差がありましたし、「保存論」の講義を1回受けたという受講生、初めから、特別収蔵庫を最初に出す受講生も中にはおります。

また、出席票として毎回コメントカードを回収して、知識の定着度の確認や講義の不備、受講生の要望を把握するために実施しています。極力、方向性を保つということです。忌憚ない意見を伺いたかったので、記述の内容は評価の対象外としています。質問は、最終講義までの通算で150件くらい寄せていただいて、すべての質問に対して各回15分ほどの時間を割いて回答しました。

それ以外に、配布資料による講義内容のまとめや、図解や写真を多用するということです。どうしても時間的制約がありますので、ノートテイクの個人差を極力低減したいということがあります。保存論ですの、口頭での説明では伝達しにくい部分もたくさんあり、資料の内部構造や微小領域、経年による変化、また処理や作業手順などをフォローするため図解や写真を多用しています。

その他、口頭や図解での説明では伝達しにくい点などもあるので、用具やサンプルなどを回覧することで、受講生間の理解度の差を極力埋めるようにしています。

サンプルは触れてみることで量感や色調、細部などを観察してもらうということです。ただ今回、例えば保存処理済みのサンプルなどは実際に手に取って見てもらったりもしましたが、実物であれば授業中に回覧はできないので、実験用のサンプルだということを明言した上で、こういったものを回覧しています。

③学生の反応や教育成果です(スライド資料 今野農 13~19)。例年の傾向として出席率は比較的高く、単位を放棄する受講生は少ないです。1年次春学期の履修者が多いために、大学の講義やテスト自体に不慣れな印象を受けます。そして学芸員資格を取るか否かも決めきれない受講生も中にはい

ます。

1年生が多いので、多くの受講生は博物館に対する基本的知識や資料に触れた経験は不足している一方で、もともと知識を持って臨んでいる受講生や特定のテーマに関心の高い受講生もいるので、講義の内容や課題の水準設定、質問事項への対応がなかなか困難な面があります。

コメントカードですが、半数以上の受講生が毎回記入してくれて、評価対象外と明言したわりには意欲的に記述する受講生が多かったです。寄せていただいたコメントでは、回覧した用具やサンプルについて、身近さとか実感といった反響がありました。

FD アンケートですが、知識関係の評価が高かった一方、スキル、判断力、苦手の克服といったところに課題を残しています。アンケートで寄せていただいたコメントですが、「パワーポイントは見やすかった」「配布資料は丁寧で勉強しやすい」と答えていただいた一方、「配布資料とパワーポイントが不一致である」といった不具合を感じた受講生もいました。この辺はちょうどいいレベルを設定するのは難しく、誰にでも使いやすいものをつくるのは難しいです。授業時の質疑応答や資料の回覧などは好評なコメントを寄せていただいたりしています。

最終テストですが、評価方法は出席重視で、保存に関するさまざまなテーマを一通り聞くことに重きを置いていて、出席8割、最終テスト2割ほどです。最終テストは論述形式で比較的容易なものです。披見可にしています。内容は3題ほどで、基本的な用語を問うものや、保存に関する受講生の考え方を問うものになっています。

披見可のため、配布資料に即した内容のものもありましたが、おおむね自分の意見としてまとめられていたように思います。課題ということに対して受動的な学生が多い印象を受けます。本来は各々の関心や専門性を自分自身で突き詰めてほしいというのが心情ではあります。

④授業上の評価と課題です(スライド資料 今野農 20~22)。成果と考えられる点としては、FD アンケートで「知識が身についた」とか「新しい発見」など、知識関係の評価が高かったことです。これは講義の構成や配分、パワーポイント、配布資料、コメントカード等で重点を置いた成果ではないかと思っています。

最後に、今後の課題です。アンケートではスキル、判断力、苦手の克服といったところが低かったということです。一方で、これ以上、個々の要望に応じて講義の内容、解説のボリュームは増やせないというのが現状です。

受講生自身の関心や意欲、主体的な学習活動を伸ばして、それを評価できないような学習課題を模索中です。それが課題です。新規創設科目につき、他大学の状況などの情報をお寄せいただければ幸いです。

以上で報告を終わりにさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

司会 今野さん、ありがとうございました。

それでは続いて里見さん、「博物館展示論」についてご報告をお願いいたします。

里見 博物館展示論の15回の授業は、私が約40年間、展示会社に勤務して、企画から設計、制作の一連の業務に長年携わってきた経験をもとにして、今年の春に同成社から出版した『博物館展示の理論と実践』を教科書にして進めています。基本的には教科書にのっとって進める方法をとっていますが、時間の関係からすべては伝えられないので、そこから選んで授業を行っています。

また展示というのは言葉だけではなかなか伝えられない分りにくいものですので、具体的な図や写真などを多く見てもらって、その事例から理解を図るようにしています。

授業の概要としては、初日にオリエンテーションを行って、15回の授業をどのような内容で進めるかを伝えて、知ってもらいたいポイントをそれぞれの章ごとに伝え、授業の展開について理解してもらいます。成績の評価については、基本的には出席率と授業態度、ならびに博物館展示を見学してもらって、展示見学レポートを出してもらいます。そして最終日に実施する試験、この三つによって評価をすることを前もって伝えていきます。

最初の授業では日本におけるディスプレイ略史を概観します。古代からディスプレイがどのような面で使われて発展してきたか。特に近世以降、人々の中でディスプレイ表現の認識が広まってきたこと、あるいは近代・現代の商品経済および文化の発展の中で、商品系展示から学芸系展示が分かれていて、そして博物館展示が誕生し、今日の博物館展示があることを理解してもらいます。

次に現在、博物館で行われている博物館展示にはどのような類型があるかを知り、それぞれの類型の目的と表現方法について学んでもらっています。また情報メディアの進展などに伴って、新しい展示の類型も生まれてきていますので、それらについて今後の博物館展示の展開の可能性、そういったものを考えるようにしています。

続いて、博物館展示におけるソフトとハードの押さえるべき項目を取り上げて解説をしています。ソ

フト面で最も重要な作業は、学芸員の考えを展示シナリオという形にまとめることですので、展示シナリオの構成の事例を紹介し、どのようにしてまとめるかということを知ってもらいます。展示シナリオを作成する学芸員が決めるべき重要なことは、まず取り上げるテーマ、そこで伝えたい目的とその狙い、そして吟味された資料の選定であることを伝えていきます。

展示の目的と狙いに基づいて、それらを分かりやすく伝える展示技術の面においては、学芸員のアイデアと展示の専門家である展示のプランナーならびにデザイナーの提案を受けて、お互いに協議して、協同作業によって進められていくということを理解してもらいます。

展示内容だけが自分の責任範囲だと考えて、展示技術や展示の専門家に任せればよいとなりがちですが、オリジナリティを生み出すのは学芸員だという自覚をはっきり認識して、学芸員が最終的な決定を行えるような知識を学んでもらっています。

具体的に知っておくべき主な知識は、観覧者に展示室でどのように移動して展示を見て回らせるかという動線の計画、そして観覧者の視線をどのように誘導するかという視線計画等々、物理的な条件、あるいは心理的条件の押さえるべき項目を学ぶようにしています。

一方、ハード面においては展示空間における床、壁、天井の仕掛けの組み込みのあり方。あるいは展示室における電気、空調、防災、防犯、そういった設備のあり方。それから観覧者に分かりやすく伝えるための解説パネルの表現の技術。模型やジオラマといった造形解説の効果と融合性。それから映像による解説の効果と注意点等々について、どのような展示技術を選べばいいのか。その特徴と効果を知ることによって、学芸員が考えるソフトを的確に伝える方法を学びます。

さらに展示レベルの高い表現技術として、展示の芸術性、物語性、共感と感動、この三つの重要な展示方法を学んで、そのためにはどのような心理的なアプローチが必要かということ、理論と事例から学び考えてもらいます。

貴重な資料の保存と展示方法も重要な授業項目です。材質の違う各種の美術工芸品の保存と展示方法については、学芸員として知っておくべき主なものを取り上げて、これだけは知っておいてほしいということで学んでもらっています。

また展示照明と保存科学も重要な知識ですので、十分理解できるよう説明するようにしています。具体的には光源による劣化の問題、それからものの材

質の劣化に影響の大きい照度基準などを理解し、あわせて展示にとって照明は大変重要な役割を持って展示の効果を大きく左右する不可欠な構成要素であるということを認識してもらうために、四つのポイントを学んでもらいます。

一つ目が実物資料の色を正しく美しく、その美しさを引き出す照明のあり方。二つ目に劣化を最小限にとどめるための展示方法、照明の方法。そして三つ目に光による演出の方法。四つ目にライティングテクニックの知識、この4点について学ぶようになっています。

展示評価の授業においては、日本における展示評価の現状を示して、アメリカが一番発展していますので、アメリカで進んでいる評価法について解説をして、日本で定着するための課題を考える授業をしています。

以上が授業の内容ですが、毎回、授業の終了のときに5分くらいの時間を与えてコメントあるいは質問を書いてもらっています。内容の理解の把握度と、それから質問に詳しく答えてお互いのコミュニケーションとして大事にしています。

今回の新カリキュラムによって展示学を学ぶ時間が新たに加わったということは、博物館学芸員養成の大きな前進だと思っています。

学生の反応は、展示は並べて見せるという一見誰でもできるようなものと考えていたけれども、この授業を受けて、一つの展示ができるためにはさまざまなアプローチが必要だということが理解できた。そして展示そのものへの見方が変わったという意見が大変多く寄せられています。その点が私は重要だと思っています。

しかし授業を行って思うことは、半期の15回の授業では時間が足りないと感じています。できることならば1年を通して授業が行われれば、前半で理論を学んで、後半で実践する。展示シナリオを考えてもらって、企画を立案して、それを評価して検討するというので、実務に近い授業が進められるのではないかと思います。以上が私の発表です。

(拍手)

司会 どうもありがとうございました。

それでは続いて、菅井さん、報告をよろしく願います。

菅井 私もパワーポイントを使ってお話をしたいと思います。博物館教育論を3年前から担当している菅井と申します。

まず博物館教育論についてということで、この中にも受講していただいた学生さんの顔、私も何となく覚えているので、いるなと確認できましたが、内

容としてはまず、博物館研究／博物館学の中で博物館教育に関する理論の講義を行っています。例えば学習理論や今まで教育学の分野で皆さんが習ってきたこととも重なりますが、基本的に理論の講義や解説を行っています。

これだけでは博物館教育という現場のある分野なので、不十分ですので、それに加えて博物館の具体的な教育活動を取り上げて、活動の理論的な意味、それから実践的な意味を皆さんと一緒に考えていくという形式で授業を行っています。

授業方法に関しては、今申し上げたように教員からの講義、主にスライド、画像を使用しています。実際の画面を見ていただいたほうがイメージしやすいので、スライドや映像を多用するようにしています。それから講義が終わったあと、次の週にもう1回、忘れてしまいますのでフォローアップを毎回行ってきました。

それから受講生による発表／グループワークに特に力を入れようと思ってやってきました。その理由ですが、博物館で仕事をしていると、若い人は乳幼児から、お年寄りの方ですと80代くらいの方まで本当に幅広い、いろいろなバックグラウンドを持った方とコミュニケーションしなければいけない場面に遭遇することが多々あります。大学生同士という近い関係ではありますが、お互いにコミュニケーションを取る一つの練習だと思ってグループワークをやってもらっています。

こういう授業をやったのは、皆さん書くことは得意というか、コメントを見ても非常に多く書いてくれる方がいます。書くこと、話すこと、あと聞くことは皆さん何となく聞いているとは思いますが、実際本当に聞けていたのかなというのは、私自身も含めて多少反省点が残る現状があります。

続いて、授業で工夫した点です。できる限り、博物館教育を実体験できる機会をつくれるように、博物館が開発している実際の教育ツールを取り上げました。今スライドに出しているものは(スライド資料 菅井薫 3)、企画提案をしたときなどによく置いてあるようなワークシートや解説ですね。そういったものを実際に使ったり見たりして、改善点を洗い出してもらうということをしました。

それから、あとは私自身が何か博物館で企画したときに、どれくらいの書類が必要になって、例えばどんな内容の書類を書かなければいけないのかということも、もちろん公開できない書類もありますので、出せる範囲のものだけ皆さんに見ていただいて、それを解説する時間を設けました。

例えばこれはワークシート(スライド資料 菅井

薫 4) です。毎年1月くらいの冬の時期になると、昔の暮らしと今の暮らしという展示を日本全国の博物館でもやっていますが、博物館によってどのような違いでワークシートをつくっているのかを分析して、それぞれの館がどういう学習理論を持ってつくっているのかということまで考えてもらえたらいいなということで行ったものになります。

他に工夫した点としては、新設科目ということもあって、博物館と教育はどういう関係があるのか、ちょっと分かりにくいという疑問に答えるようにしました。あとは他の科目との関連ということで、かなり重なるようなトピックもあったので、その都度、ここはこの科目との関連がありますということ言うようにしました。

三つ目は、学生の反応や教育成果ということですが、これは具体的にお話をしたほうがいいのではないかと、具体的なことを書きました。これは1年目にあったことですが、教職科目と学芸員科目の両立に悩む学生がいました。これに関しては私自身がどういうというよりは、ゲストスピーカーとして大学院生で科学館でボランティアをしながら研究もして、それから教職も取っている人にたまたま来ていただいたということで、わりと自分一人でもって考えていた考え方が相対化できたという反応を示してくれたこともありました。

あるいは、博物館学や類する専門領域に関心のある受講生が、自主的に授業外での学びの機会や実践の機会を求めて参加をしてくれたということ。

最後になりますが、授業上の評価と課題ということで、特に私はここに比重を置いてお話をしています。学芸員資格はとりあえず取得するけれども、学芸員になることは難しいという現状から、なかなか受講に対するモチベーションが高まりにくい。これは私自身もそうでしたが、それは授業をしている現状でも感じ取っています。

教員側にとっても、学芸員養成か、あるいは理解者養成かという二項対立のロジックにとらわれて授業づくりをしても息詰まるだけとか、それに代わるような授業づくりが必要とされているのではないかと常々感じています。

あとは、最近はインターンシップが博物館と大学で提携を結んで行われています。しかし悲しいかな、人材育成という目的ではなく、労働力で終わってしまったり、きちんと教育的な配慮が行われなままに行われてしまうようなこともありますので、そういった意味で今後、大学と博物館とが一緒になってカリキュラムを考えていくということが望まれているのではないかと実感します。

それから今のお話とも少し関わることですが、行き過ぎた現場至上主義といいましたが、博物館と大学の間がなかなか埋まらない理由に、現場を経験した人でないと語り得ないという空気が多少あるのではないかと思います。そうすると大学で学ぶべきこと、あるいは大学だからやれる学びというのは何なのか、そろそろ真剣に考えないとなかなか学芸員資格課程の授業は構成できないのではないかと、私自身は考えつつあります。

これは結論になります。こんな立派なことが果たしてできるかどうかという、なかなか心もとないところはありますが、大学で学ぶべき、あるいは大学だから得られる例えば学芸員資格を取るための学びとは何なのか。こういうことは個人的に考えたところですが、博物館の周りで起きていることは具体的な現象や、本当にドロドロとした出来事です。

そういう中でそれを全体的に他の博物館の中で考えるとか、客観的にどこかに位置付けるということは、働いていると冷静にそれを振り返ることはできません。ですが、大学で理論あるいは制度的なこと、そういうことを学んだことで、いったん自分がドロドロとした世界で実感してきたことをもう一度整理し直すという作業が大学での学びにあるのではないかと思います。

そういうことを少しでも学芸員課程の中で皆さんと一緒にできていければと私自身は考えています。以上です。ありがとうございました。(拍手)

司会 菅井さん、どうもありがとうございました。

それでは続いて「博物館経営論」について、杉長さん、よろしく願いいたします。

杉長 本日、学芸員資格課程の教育について、このような場が設けられて、一番勉強になっているのは私ども兼任講師ではないでしょうか。兼任講師には、他の教員がどのような視点と方法で授業をされているかを知る機会が少ないので、関係者一同で、学芸員資格課程の教育の在り方について議論することは意義のあることです。今後も、このような場が設けられることを期待しています。

私は、民俗学者の宮本常一さんのモットーである“歩く・見る・聞く”と“記録する・考える”という視点を重視して授業に取り組んでいます。授業での講義と受講生の自己学習を通して、受講生が博物館経験を深化させ、博物館を経営体として見る視点をもつことを、担当している博物館経営論の目標にしています。

次に、授業に当たっての基本的姿勢をご説明します。初回の授業時に、受講生が博物館経験をどの程

度もっているかを調査しています。調査するのは、配布資料の授業実践の基本的姿勢の1に記載した4つの項目です。担当しているのが前期の授業ということもあり、1年生が多数受講しています。1年生は、入学前の1年間は、受験勉強に追われ、ほとんど博物館に行っていないということが分かりました。このことを踏まえて授業を組み立て、博物館経験の少ない受講生も、学期末には、博物館についてリアルな認識をもてるように取り組んでいます。

博物館についてリアルな認識をもってもらうためには、教員が教室で教えるだけでは限界があります。受講生が主体的に博物館について学んでいく仕掛けをつくる必要があります。受講生が学ぶ際には、先ほどご紹介した宮本常一さんのモットーが実現することを重視しています。

また、授業時には、受講生から毎回多数の質問やコメントを頂戴します。質問やコメントを読むと、受講生のもつ多様性に驚きます。また、授業回数が進む毎に、受講生の博物館経験が深化していることを感じます。受講生各自が他の受講生のもつ多様性を感じながら、受講生が相互に影響しながら進行していくことに留意しています。

授業外の取組である自己学習の仕掛けについてご説明します。授業外の自己学習という位置づけで、2種類のレポートを書いてもらっています。博物館経験を深化させる上では不可欠な学習と位置づけています。受講生が主体的に学ぶ仕組みを設定するのは、教員の任務の中でも最も重要なものだと思います。

2種類のレポートのうちのひとつが、学期中に提出する「課題レポート」です。授業毎に複数のテーマを提示して、多くのテーマの中から受講生に6つのテーマを選んで随時提出してもらいます。

もうひとつのレポートが、学期末に提出してもらう「期末レポート」です。三つの選択肢を設けています。

一つ目は、受講生が選んだ博物館について経営分析をするもの(分量はA4判で5~10枚)です。二つ目は、ノートまるごと1冊に博物館関係の新聞記事や自分で見つけた情報をスクラップして、コメントを記入するものです。アート作品のようなものを提出する受講生がおられ、そのセンスには感心しています。三つ目は、ブックレビュー(書評)です。分量が多いものであれば1冊、新書であれば2冊を対象に書評(約3,000字)を書いてもらいます。

課題レポートと期末レポートを合わせると、1万字位になります。きついかとは思いますが、受講生は積極的に取り組んでくれています。4月時点では

レポートに不慣れだった受講生が、学期末には内容の濃い、読み応えのあるレポートを提出します。

最後に、受講生の博物館経験についてご紹介しておきます。平成26年の前期の受講生で初回に出席したのは44人、そのうち1年生が31人でした。平成25年度1年間の博物館経験(平均回数)は、1年生1.26回、2年生6.50回、3年生2.00回、4年生6.00回、院生12.00回でした。受講生の多数を占める1年生31人のうち、13人は0回でした。このような状況を考えると、受講生に一定の知識があることを前提に教員が講義するのは、とりわけ前期の場合は、避けなければなりません。受講生の実情を踏まえて、受講生の博物館経験を段階的に豊かにしていくことを目標に授業に取り組むことがなによりも重要です。以上で、私の報告を終わります。ありがとうございました。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。

それでは続いて田尻さん、よろしく願いいたします。

田尻 ミュージアム情報・メディア論の春学期と、博物館実習Ⅱの春学期のほうを担当している田尻と申します。きょうはこういった場にお招きいただきまして、ありがとうございます。

今年度は二つの授業に関わっている関係もあって、二つのことをまとめて1枚の紙に書いた(配布資料1 田尻美和子)のですが、シンポジウムⅠのテーマは新カリキュラムの実践と課題ということで、おそらく博物館情報・メディア論のほうに注力してお話ししたほうがいいのではないかと思っています。2013年度と2014年度の2回、博物館情報・メディア論をやらせていただきました。

授業の概要ですが、テーマとしては「博物館における情報の活かし方を考える」ということで、情報の整備・提供・活用に関して多様なテーマから説明をしました。また私自身が市立の小さな博物館の学芸員としても勤務をしている関係もあって、この市町村規模の博物館の現状と課題というのも、自分の経験のこともありますので、授業の中では事例として多く取り上げています。

将来、博物館に関連する仕事を志す者に対しては、博物館情報の提供と活用に関する基礎的能力を身につけることを目指しています。ただメディア論ということで、実務的な器具の取り扱いとか、そういったこともやるべきなのかもしれませんが、どうしても講義中心のことになっています。また博物館における情報の活用方法などミュージアム・リテラシーを高めることも目標の一つに捉えています。

一方で実習Ⅱのほうでは、1年かけて、企画展の

開催までのプロセスを体験してもらおうということで、ここに書いているような形で進めています。

授業上で工夫した点は、先ほど講義中心と申し上げましたが、その中でもグループワークを少し取り入れました。他の先生方からもグループワークをやっている方、やっていない方の話がありました。人数が多い中で難しいのですが、一つは展示図録、カタログをどのように見たらいいのかのグループワーク。

実際、学芸員になったら、それを自分で執筆したり、あるいは写真を選定したりということになってくるわけですが、先ほど菅井先生のお話にもあったように、私の授業も1年生がかなり多くなっています。授業の中では1年生も2年生も3年生もそんなに違いを感じているわけではないのですが、その日の感想カードなどを見ていくと、この授業を通して図録を初めて知ったという学生もいる中で、一つのメディアとして図録を見させるということを重視しています。

それから資料記述。いわゆるドキュメンテーションと呼ばれるものですが、これが学芸員の仕事の中では非常に大事な部分になってきます。これも資料を文字で説明して他の人に伝えるというメディアに関わるものですから、きちんと教えるようにしています。

実習Ⅱはさすがにグループワーク中心ですが、現場の学芸員とできる限り同じプロセスで作業を体験してもらえるように、限られた時間と設備、道具の中で工夫をしています。

次の点として、これは他の先生からもたくさん出ていましたが、出席カードにコメントを書いてもらって、そこに自由に質問なども書いてくださいと言っています。その質問に対して、次の回の授業で私自身も積極的に回答をするようにしています。「そのためか各回質問が大変多く」と書きましたが、おそらく他の先生方がかなり熱心に回答されていることも影響しているかと思います。

メディア論のほうでも毎回たくさんの質問をいただいている、多いときは10人以上の質問に答えなければいけないこともありました。かなり時間を取られてしまうのですが、これは大切なことと思ってやっています。他の学生はこんなことを考えているのだということ一つ一つの勉強の機会になりますし、私にとっても、この部分は理解が難しかったのではないかとということで、次回以降でより補足して説明するという機会になっています。

それから自分の経験等もありますので、学芸員の実務を授業の中で積極的に紹介するようにしてい

ます。テキストは『博物館情報・メディア論』というタイトルの本を中心に使っているのですが、それだけではなく、実際に学芸員が現場で置かれている状況や、その際にどう対処するか。例えば写真を展示するとなったときに、その権利問題をどのように処理するかとか、そういったこともお話するようにしています。

学生の反応や教育成果ということで、私自身が未熟な教員なものですから、どうしてもひとりよがりの授業になってしまって、実際にどう考えているのか分かりにくい部分もあるのです。あと人数も多いので、なかなか個別にお話する時間が取れません。出席カードを主なコミュニケーション手段として考えざるを得ないのですが、そこで見る限り、情報メディア論というのは最初は特に分かりにくいようです。

メディアとは何か、情報とは何か。博物館をメディアの観点からどのように考えたらいいのかということも最初の2、3回は主に話すのですが、そういう中で理解度が少し増していくような様子が見られているので安心しているところです。特に今年度は質問も多く、また、コメントカードも内容からすると、自分なりにいろいろ考えているのが感じられました。すごくよかったと思います。

それから長文、4000字のレポートを課題として課しています。これは野田市郷土博物館の展示と講座を実際に見に行つて、あるいは聞きに来てもらって、それについてメディアの視点から分析をするというものです。ここで取り組み方が少し分かるというか、熱心な方は講座の時間よりもかなり早くから来て、質問をしたり施設を見学する様子がうかがえます。

なぜこの課題を課しているのか、直接メディアに関係ないのではないかという意見も学生から出たことがあるのですが、実際に現場に行つて学芸員から話を聞くとか、あるいはその講座に参加している市民の方から話を聞くということが、そのあと学芸員になったときに絶対に仕事の中で出てくると思います。それを勉強する機会と考えて課しています。

ただ、先ほど金山先生の基調報告の中で、新カリキュラムになったあとの理解度の話がありましたが、メディア論は理解度が低いほうだったので、これは課題だなというか、他の科目と同じくらいの理解度になってもらえるように頑張らなければならないと思っています。

授業上の評価と課題です。前半2点は私自身の課題になってしまったのですが、学生の反応をよく見ながら授業を進めたいと思っています。特に博物館

経験が私の想像よりも不足しているであろう学生たちに対して、分かりやすく噛み砕いて説明するにはどういったやり方がいいのか、考えていきたいと思っています。

そして講義の内容やレポートの課題の意図。なぜこれをみんなにやってもらっているのか、なぜ今グループワークをやっているのか、十分理解してから取り組んだほうが成果も上がるのではないかと思います。

それから菅井さんからお話があった学芸員を育てているのか、あるいは理解者を育てているのかという点にも関わってくるかと思うのですが、学芸員あるいは博物館の何らかのスタッフになったときに、特に私自身が小さな博物館で働いているからだと思うのですが、受け身の態勢ではなくて、自分で考えて行動できる人材であってほしいと思います。ですから、そういう人を育てていけるような授業になればいいのではないかと考えます。

学芸員になれない、あるいは博物館ではない分野に学生が進んだとしても、メディア論の授業で学んだことを広く自分のキャリアの中で生かしていただけたら、また、その後の人生の中で博物館との関わりを持っていただければいいなと思っています。私の報告は以上です。(拍手)

司会 田尻さん、どうもありがとうございました。以上、それぞれの皆さんから担当していただいている科目についての内容の紹介や、その評価について実際にお話をさせていただきました。

これから 30 分ほど時間を設けて、少し深掘りした話をしていきたいと思うのですが、まず私のほうから全体の発表を通してコメントをさせていただきたいと思います。その前提として、この新カリキュラムを開設するにあたって、これは私が先ほど報告をしたように、授業の科目数が増えると、担当の教員数も増えます。従来ですと、ある程度限られていたから、その中で比較的、意思疎通もできたし、相互に授業の内容も横目で見ながらある程度確認ができたと思います。

ところが、新カリキュラムで科目が増えると、なかなかこれまでどおりにはいかないことが分かりました。そこで昨年度は、きょうの皆さんと、また他の博物館関連の科目を担当している先生方全員に集まっただけき、学芸員養成科目の担当者による FD ミーティングを実施しました。

内容については、先ほど報告していただいたようなことをベースに実施しました。相互の授業の内容について確認をしたり、それから先ほど杉長さんがおっしゃったように、他の先生方がその科目でどの

ような授業を展開しているのかを確認をする。すると、授業間での重複を避けることができるし、全体としての整合性をはかることができます。

そのようなことを通して、学芸員課程の教育の質を高めていくことができるのではないかと思います。単に科目を増設したから質が向上するというものではなく、大学ごとに担当者同士が工夫して運用していくことです。それとセットにしなければ質の向上はなかなか図れないと思い、私たちは実施しています。そうした意味では、以前に比べて、科目間の整合性もはかれるようになってきていると思います。

里見さんのほうからは、展示の企画がなかなかできずに時間のゆとりがないという提起がありましたが、それについては、例えば博物館実習Ⅱという授業の中で展示の企画をつくる内容の授業をやっています。それから実際に展覧会についてのポスターやチラシを作成しています。ただ、先ほどの FD ミーティングのときに担当の先生が都合で出席できなかったのですが、そういったことも一言付け加えさせていただきます。

いろいろとお話を聞いてみると、総合的にいっても、教育上の評価が高くなってきていると思います。現在、大学は、いかに教育の質の確保を図っていくのか。これは学芸員課程に限らず、大学全体としても、その取り組みが積極的に行われています。それぞれの報告からは、グループ学習や教員と学生との双方向のアクティブラーニングを実施しているという特徴を確認することができます。

それから、皆さんの授業の中では、博物館の現場に行き、そこで博物館のバックヤードを学生たちが見学する。あるいはフィールドワークを導入していることもあります。

それから日常的な授業の中で配布する出席票には、授業についてコメントを書く欄があるのですが、中には学生からの質問もあります。質問に対して、次の授業で担当の教員が丁寧に対応しています。つまりフィードバックを、きちんとやっているということも一つ特徴です。

それからすいぶん課題が多いようです。宿題を出す。一般的に大学生が1週間に授業外で学習をする時間が30分だというデータがあります。場合によっては全然やらないところもあるようです。それに比べると、この学芸員課程の授業は宿題を出して自習をする時間も確保している。そうした教育上の特徴もあるのだろうと思います。

それでは、皆さんにお聞きしたいのは、この新カリキュラムは他の大学では2年生あるいは3年生

から導入をしているのですが、法政大学の場合には1年生からこういう形で導入をしています。他の大学は1年生では博物館概論を入門的な授業に位置づけて、その後の2年生や3年生から経営論や展示論といった各論を課していくのが一般的になっています。

本学では、私と学務事務とが協議して、1年生から新カリキュラムは導入することにしました。それについての報告は先ほどの通りです。いかがですか。杉長さん、これは先ほど問題提起も少しあったようですが、1年生で実際に授業に出ている人数が30数名ということで割合的には多い。その辺りで教育上の支障のようなものは何かありますか。

杉長 支障がないと言うとうそになるかもしれませんが、1年生が大勢いることを意識して取り組みれば十分対応できます。4月に入学した1年生は、学期末までの半年でもものすごく変化します。学芸員資格関係の複数の科目を勉強し、博物館に足を運ぶことによって、博物館の見方がどんどん変化・深化しています。このことは、受講生自身が体感しているようです。受講生の変化を見ると、教員も士気が高まるように思います。芸事などの身体活動は若いときから始めた方が身につくと言われていています。身体感覚に裏付けられた知識を身につけることの重要性を考えると、学芸員資格科目も1年生から学ぶ方がよいのではないかと思います。

司会 ほかの方にもお聞きしたいのですが、その辺りのことについて何か発言はありませんか。里見さん、いかがですか。展示論というのは新設の科目になりますが、1年生の受講者が多いようですが。

里見 1年生は高校を出て希望に夢を膨らませている中で、取り組みについて真剣だなという感じがします。真面目に取り組んで新しい知識を得ようと、そういう真剣さが1年生から感じられます。そういう意味では学びたいという意味が非常に強いように思っていて、いいのではないかと思います。

ただ先ほどの杉長先生のデータにもありますが、博物館をあまり見ていないという現実があるようです。そういう意味では、私自身、当然分かることだろうと思って話をしたことが、あとの質問で分かっていなかったのだなど。それは逆にまた私の勉強になるので、次からは平たく砕いて説明すればいいということで、私は1年生から受けることについてはいいのではないかと思います。

司会 最初に受講する頃は、これはどの授業についても学生の理解度はあまり高くないと思うのですが、問題は授業を進めるにつれて学生の習熟度がどれだけ高まるかということだろうと思います。

里見さんがおっしゃったように、最初は博物館の経験知はあまりないが、授業を進めていくにつれて、最後の授業かそのあたりで、展示論について学生の理解度が深まったとか、何かそういうものは具体的にありますか。

例えばグループワークとか、学生の授業の評価とか、あるいは出席票のコメントなど、そういったものを通して、最初の頃と授業のまとめ的な段階を比べて学生の習熟度の変化を確認することができるものでしょうか。

里見 私の授業の中では、授業を前半行って、後半に実際に博物館の展示を三つの館を指定して、上野の科博と東博と西洋美術館、この三つから一つを選びなさい。それを見て、私が授業で伝えたものについて、展示技術や表現の視点で展示を見てきなさいと。そのレポートが返ってくると、私自身も勉強になる指摘、考え方みたいなものが感じられて、ずいぶんと成長したなと思うことがたくさんあります。そのようなことで習熟度が高まっているなという感じはいたします。

司会 それでは今野さん、博物館資料保存論という新しい科目で1年生の受講者は多いようですが、その辺りはいかがですか。

今野 1年生の受講者数が多いので、博物館がまず多様であるということ、また資料も多様であるということに対する理解がやや不足しているなという感は否めない気がします。

例えば授業時のコメントカードの質問で、複合している例えば人形のような材質であれば、何を優先的に保存するのかという質問を受けたりもするのですが、その辺は資料の置かれている環境であるとか、博物館それぞれの対応とか価値の重きが違うので、それはケース・バイ・ケースで絶対的な優先順位は定められない、言い切れないところがあります。

そういう点では博物館に対して、それぞれの館がどういうところに重きを置いているのかとか、資料がどんな状態で保存されているのかということ、まず概論や資料論できちんと学んでから保存論に進んでほしいなというところはあります。

司会 1年生が受けていることで、例えば2年生や3年生と比較して特に違和感のようなものを感じることはありますか。それはありませんか。

今野 課題を設定すれば、おそらくそれなりのものをこなすであろうと思うのですが、課題を受け身的に待っている方が多いという印象はあります。

保存というのはそれぞれ専門性が強い分野ですので、何か一つ民俗だったら民俗、紙だったら紙というように自分で好きなことを一つ定めて、そこで

自分で調べたり、紙の専門の博物館に行ってみるとか、本当は自分自身で動かないとそれから先のレベルにはなかなかいかないと思います。

司会 それでは次にもう一つの話題として、菅井さんのほうから問題提起をいろいろと具体的に出していただきました。それらについて全てここで話をするのは時間がありませんが、その中で私が特に気になったことは、従来から博物館の受講生に対して教員側のほうでもよく言うことですが、学芸員としてプロフェッショナルになっていくのか。一方では博物館のよき理解者を育てていくためにも、この資格を取るメリットがあるという説明の仕方をします。

それについて菅井さんは二項対立的な概念で、別の考え方もあるのではないかというお話だったと思いますが、田尻さんからはそれ以外に学芸員課程を取得する教育上のメリットや、意味があるのではないかという話がありました。

菅井さん、そういう発言をされた意図について、なぜそういうことを問題にしたのか、その辺を手短にご説明いただけますか。

菅井 なぜそういう問題提起をしたのかということですが、当然このカリキュラムが変わるときに、カリキュラムをどうするかということで、理解者養成なのか、それとも専門家、専門職を養成するのか、かなり大きな論点として挙がっていて、結局、結論がはっきり出ないままに終わったという印象があります。

私自身も実際にどうなるのかなという感じで、正直なところ、どっちつかずではあるなと思いつつ、両方を両立していく形でするしかないかなということやってきたので、皆さんがどう考えていらっしゃるのかということを、今回、問題提起させていただきました。

司会 菅井さんの疑問の一つを披露していただきましたが、それに関連して田尻さんも発言していたかと思います。その辺り、田尻さんのほうで先ほどの発言に加えて補足のようなものがあれば、ご説明ください。

田尻 大変難しい課題だと思います。菅井さんの指摘はもっともだと思います。まず、そもそも学芸員になるのは難しいというのは私も授業の中で触れざるを得ないところで、それによって取っても意味がないのだと学生が思ってしまうのもしょうがないことの一つだと思うのですね。

だからといって、理解者というわけでは全くなくて、理解者というのは何だろうかという考え方の問題だと思います。理解者というのを従来の博物館をただ見に来る人、受動的に博物館を体験する人

くらいに受け止めてしまうと、それにコストをかけて大学で養成する意味はないのではないかと思います。

ただ、私が今考えている本当の意味での博物館活動の理解者というのは、私が働いている博物館のことで話すと、たくさんの市民参加的な活動であるとか、市民コミュニティとの連携的な活動をしています。その人たちは全く博物館のことを学んできていない人たちがほとんどです。

その方たちに、博物館はどのように能動的に利用できるのか、資料の利用の仕方はこういうことができるということを話すところから始まるわけですが、これから社会に出て行かれる方たちには、たとえ他の仕事に就いていても、他のコミュニティに所属していても、博物館は自分の活動のために利用できるものなのだということを知ってもらおう。

かつ、それを例えば学校の先生になったときに、授業の中で博物館を使おうということによって役立ててもらえる。そのときにすぐそういうアクセス、行動が取れるというのはこれから非常に必要なことではないか。そういう理解者を養成していくことに意義があると思いますし、決して二項対立にはならないと考えています。

司会 この二項対立ということについて、どなたかご発言はありますか。杉長さん、何かありますか。

杉長 博物館の理解者養成ということについてどの程度の共通理解ができているかわかりませんが、プロフェッショナルを養成するためには、プロフェッショナルの養成を目標にして全力で取り組む必要があります。理解者の養成を目的にしたら、プロフェッショナルの養成は言うまでもありませんが、理解者の養成も難しくなるように思います。プロフェッショナルの養成を目標に授業して、運良くプロフェッショナルになれる人がでてくる。一方、プロフェッショナルにはなれなかったけれども、博物館のヘビーユーザーになったりサポーターになったりする人がでてくる。それぞれの人生の中で、結果として異なるものが出てくるのではないかと思います。

司会 この辺りでそろそろ、このシンポジウムのまとめをしたいと思いますが、最後に私のほうから一言コメントをさせていただきます。

今の話題については私の報告の最後のところでスライドをお見せしましたが、学芸員課程を履修して卒業する学生が、本学の場合には40～50人ほど毎年います。そのうち学芸員になる人は多くても1人、2人です。ほとんどの人たちは学芸員になりません。

ただし卒業してから、私のところは同窓会をやっていますが、これまでの10年間卒業生が年に1～2回の同窓会に集まります。そのうち学芸員になった人たちはほんの一部です。多くは企業に勤めていたり公務員など学芸員にはならなかった卒業生たちです。

そうした卒業生と話をしていると、学芸員課程を取ってよかったという。それは理解者ということでもないし、ヘビーユーザーということでもないかもしれないけれども、要は学芸員課程で学んだことが一つの素養となり身について、視野が広がったという言い方をします。広い考え方になって、そこが自分にとってすごく役に立つ、あるいはそこが心持ちとして人とはちょっと違う自分がいるのだと、そういう言い方をする卒業生が何人もいます。

担当する大学の教員というのは、学芸員に就職した人たちとの付き合いは多いのですが、学芸員にな

らなかった卒業生との付き合いはそれほどでもないかもしれない。だけど、私のところはそういう付き合いがあるので、むしろプロにならなかったけれども、そうではないところの資格課程の教育的なメリット。もちろんプロになるのが一番いいのですが、副次的なものかもしれませんが、そのような教育的な成果のあることを実感しています。

それが菅井さんの問題や疑問に直接の回答になったかどうかは分かりませんが、第1部のシンポジウムについてはこれで終了させていただきたいと思います。なお、フロアの皆さん方からいろいろご質問やご意見もあるかと思いますが、それはシンポジウムⅡでまとめてお受けしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それではご報告いただいたパネリストの皆さん、ありがとうございました。(拍手)

博物館資料保存論
ミュージアム資料保存論
— 講義の現状と課題 —

今野 農

1

① 授業の概要

1) 受講対象等

- ・春学期
- ・受講者数: 50名程度(本年度)
※単位取得者49名
※1年次履修者が7割ほど
=「概論」「資料論」を未履修、
履修中の受講生が多い。

2

2) 内容: 資料保存に関する多様で
広範な分野を網羅。(広く、浅く)

- ・序盤「資料(材質の種類・劣化要因、調査、修復、取扱いなど)」
- ・中盤「資料の環境管理(温湿度、有害物質、光、生物、災害)」
- ・終盤「史跡等、野外の遺産(歴史的建造物の保護、自然環境の保護)」

※講義の要点は配布資料参照。

※標準的なテキストの内容を咀嚼し、
理解できるように努める。

3

・課外授業: バックヤード見学。
(受講生の要望を受け、本年度より試み)

・7月26日(土)神奈川県立歴史博物館に
依頼。(参加者: 5名)

⇒「評価」に含めないことを明言。
強制参加にしない。

4

3) 講義形態

・パワーポイントによる講義が中心。

※時間的要件: 1テーマあたり90分。

※施設的要件: 講義室。

※受講者数: 未定。

⇒グループワーク、ディスカッションは
行えない。

※科目の性質上、資料に即したワークは、
事前の準備、専門的設備を要する。

5

4) 講義の目標

・「最低限の心構え」と、「各テーマの導入」
程度の知識を身に付けさせること。

⇒資料を大事に扱う姿勢。

⇒資料を将来に引き継いでいく必要。

⇒資料の種類、館での対策の多様さ。

6

②授業上で工夫した点

1) 第1回授業時にアンケート実施 (本年度より実施)

目的①: 資料保存に関する知識のレベル、
講義の関心事項を把握するため。

目的②: 受講生同士で、考えていることの
共通基盤をつくるため。

7

※第1回授業時アンケート集計結果の概要 《配布資料p1》

2-2: 興味を抱いている資料(分野)

4-1: 本講義のテーマの内、関心のあるもの

⇒ 興味の傾向は分散。

⇒ 「資料」への関心は洋画、考古資料等、
「講義」への関心は修復、歴史的建造物が
比較的高率を示していた。

8

3-1: 博物館での資料保存の取り組みに
ついて知っていること。

・無答数: 21 ⇒ 「はじめて」の人に
講義の水準を合わせる。

・記述の内容は、講義で扱うものに集中。

⇔ 学年、学科を問わずレベルの差。

⇔ 「保存論」の講義の経験者もいる。

温湿度管理: 10、照明: 8、空調: 3、有害生物管理(IPM、虫
干し、防腐剤、薬剤を避ける): 3、収蔵庫(特別収蔵庫): 2、
展示設備(ケース): 3、取扱い(手袋、慎重さ): 4、輸送: 1、
台帳管理: 1、二次資料化(拓本、レプリカ): 3、保存処理(冷
凍保存、真空保存、エンバミング): 3、史跡・建造物の修
理(解体、はぎとり): 2、修復(再塗装、劣化箇所の補修):
2、専門家(学芸員): 1、分かりません: 1

9

2) 出席票としてコメントカードを回収(毎回)

・知識の定着度を確認、講義の不備、
受講生の要望を把握するため。

※極力、双方向性を保つ。

(記述の内容は「評価の対象外」と明言)。

・およそ150件(最終講義までの通算)
すべての質問に対し、各回15分ほどの
時間を割いて回答。

10

3) 配布資料による講義内容のまとめ、 および、図解や写真の多用

※時間的制約

・ノートテイクの個人差を低減。

・口頭での説明では伝達しにくい部分

(資料の内部構造や、微小領域、

経年による変化、作業手順等)のフォロー。

例) 脱皮痕、梱包手順



11

4) 用具やサンプルなどの回覧

・口頭や図解での説明では伝達しにくい点、
受講生間の理解度の差を補う。

・サンプルは、触れてみることで量感や
色調、細部などを観察させる。

例) 保存処理済み木材サンプル

※現生の実験用であり、実物であれば、
講義中に回覧できないことを明言。

12

③学生の反応や教育成果

1) 例年の傾向

- ・出席率は高く、単位を放棄する受講生は少ない(本年度は3名)。
- ・1年次春学期履修者が多いため大学の講義・テスト自体に不慣れな印象。
- ・学芸員資格を取るか否かを決めきれていない受講生もいる。

13

- ・多くの受講生は、博物館に対する基本知識、資料に触れた経験の不足。



- ・もともと、知識をもって臨んでいる受講生、特定のテーマに関心の高い受講生もいる。

※講義内容や課題の水準設定、質問事項への対応が困難。

14

2) コメントカード

- ・半数以上の受講生が、毎回、記入。
- ・評価対象外と明言した割には、意欲的に記述する受講生が多かった。

※回覧した用具やサンプルについて、「身近さ」「実感」といった反響がある。

15

- ・興味本位、思いつきとも思われる質問
- ・統計的に把握できないような質問
- ・材質ごとの絶対的な優先順位などの質問
- ・自分自身で調べた方が良いと思われる質問(個人的な内容) ...等もある。

⇒資料や館の置かれている「多様さ」についての理解が薄い。

16

3) FDアンケート(7月12日・授業時。n=45)

《配布資料p2》

- ・「知識」関係の評価が高い。
- ・「スキル」、「判断力」、「苦手の克服」が低い。
- ・「パワーポイントは見やすかった」
- ・「配布資料が丁寧に勉強しやすい」
- ・「配布資料とパワーポイントの不一致」
- ・授業時の質疑応答や資料の回覧は好評。

17

4) 最終テスト

- ・評価方法は出席重視。保存に関する様々なテーマを一通り聞くことに重きを置く。(出席8割:最終テスト2割)
- ・最終テストは論述形式で容易なもの。(披見可)
- ・内容は、3題ほどで、基本的な用語を問うものや、保存に関する受講生の考え方を問うもの。

18

- ・披見可のため、配布資料に即した内容のものもあるが、概ね自分の意見としてまとめられていた。

⇒「課題」に対して受動的な学生が多い印象を受ける。

⇨本来は、各々の関心・専門性を自分自身で突き詰めてほしい。

19

④授業上の評価と課題

1) 成果と考えられる点

- ・FDアンケートで「知識が身についた」「新しい発見」など、「知識」関係の評価が高かったこと。

※講義の構成や配分、パワーポイント、配布資料、コメント・カード等で重点を置いた成果。

20

2) 今後の課題

- ・FDアンケートで「スキル」、「判断力」、「苦手の克服」の評価が低かったこと。



※これ以上、個々の要望に応じて、講義内容、解説のボリュームを増やせない。

21

- ・受講生自身の関心・意欲、主体的な学習活動を伸ばし、それを評価できるような学習課題を模索中。

※新規の創設科目につき、他大の状況など、情報をお寄せ頂ければ幸いです！

22

博物館資料保存論・ミュージアム資料保存論／今野 農

①授業の概要

- 1) **受講対象等**：春学期。50名程度（本年度、単位取得者49名）。1年次履修者が7割。
- 2) **内容**：博物館の資料保存に関する多様で広範な分野を網羅した。
 - ・序盤「資料（材質の種類・劣化要因、調査、修復、取扱いなど）」：「資料」は劣化し、劣化したら元に戻ることではないこと、「資料の価値」は多様で時代とともに変化すること、他の博物館機能との兼合い。
 - ・中盤「資料の環境管理（温湿度、有害物質、光、生物、災害）」：博物館の保全対策。
 - ・終盤「史跡等、野外の遺産（歴史的建造物の保護、自然環境の保護）」：館内にとどまらない、野外における資料保存と博物館の役割。
 - ・本年度は課外授業として、神奈川県立歴史博物館のバックヤード見学を実施した。
- 3) **講義形態**：各テーマを1コマ（90分）で終える必要や講義室という設備の要件もあるため、パワーポイントによる講義を中心とした。
- 4) **講義の目標**：最低限の心構えと、諸テーマの導入程度の知識を身に付けさせることとした。

②授業上で工夫した点

- 1) **第1回授業時にアンケート実施**：資料保存に関する知識のレベル、講義の関心事項を把握するため、および受講生同士で考えていることの共通基盤をつくるために実施した。
 - ・資料や講義テーマの関心は分散しており、「資料」では歴史的建造物、洋画、日本画、考古資料、「講義」では、修復、歴史的建造物の保護、伝統的保存法が比較的高率であった。
 - ・学年、学科を問わず、もともとの知識のレベルには差があった。
- 2) **出席票としてコメントカードを回収**：知識の定着度を確認、講義の不備、受講生の要望を把握のために実施し、およそ150件すべての質問に対して毎回15分ほどで回答した。
- 3) **配布資料による講義内容のまとめ、および図解や写真の多用**：ノートテイクの個人差を低減し、口頭での説明では伝達しにくい点（資料の内部構造や、微小領域、経年による変化等）をフォローした。
- 4) **用具やサンプルなどを回覧**：言葉や図解で伝達しにくい部分や受講生間の理解度の差を補うために実施し、サンプルは、触れてみることで量感や色調、細部を観察させた。

③学生の反応や教育成果

- 1) **例年の傾向**：出席率は高く、単位放棄する受講生は少ない。1年春学期のため、学芸員資格を取るか否かを決めきれていない学生もいる。
 - ・多くの学生は、博物館に対する基本知識、資料に触れた経験の不足な一方、もともと、知識をもって臨んでいる受講生、特定のテーマに関心の高い受講生もいるので、講義内容や課題の水準設定が困難である。
- 2) **コメントカード**：毎回半数以上の記入があり、意欲的に記述してあった。
 - ・興味本位、思いつきとも思われる質問、統計的に把握できないような質問、絶対的な優先順位などの質問、質問者自身で調べた方が良くと思われる質問もあった。
- 3) **FD アンケート**：「知識」関係の回答が高い一方、「スキル」、「判断力」、「苦手の克服」が低かった。
 - ・「パワーポイントは見やすかった」「配布資料が丁寧で勉強しやすい」というコメントがあった一方、配布資料とパワーポイントの不一致という指摘もあった。
 - ・授業時の質疑応答や、資料の回覧には、好評なコメントもあった。
- 4) **最終テスト**：論述形式で容易なもの（披見可）。内容は、3題ほどで、基本的な用語を問うものや、今後の取り組み方針、保存に関する考え方を問うものとした。
 - ・披見可のため、配布資料に即した内容のものもあるが、概ね自分の意見としてまとめられていた。

④授業上の評価と課題

- 1) **成果**：FDアンケートで「知識が身についた」「新しい発見」など、「知識」関係の満足度が高かったことは、当該授業の成果であると考えている。
- 2) **今後の課題**：FDアンケートで「スキル」、「判断力」、「苦手の克服」の評価が低かったこと、その対策として、個人の関心・意欲、主体的な活動を伸ばして、それを評価できるような学習課題を模索している。

博物館資料保存論・ミュージアム資料保存論 (今野 農)

●第1回授業時アンケート結果 (4月12日の出席者のみ。n=52)

I. 受講者属性

学科	計	内訳	学年	計	内訳
政治	2	3.8%	1年	36	69.2%
国際政治	1	1.9%	2年	13	25.0%
哲	5	9.6%	3年	2	3.8%
日本文	9	17.3%	4年	0	0%
英文	3	5.8%	大学院	1	1.9%
史	14	26.9%			
地理	4	7.7%			
心理	3	5.8%			
国際文化	3	5.8%			
人間環境	3	5.8%			
キャリアデザイン	3	5.8%			
都市環境デザイン	1	1.9%			
史学専攻	1	1.9%			
合計	52	100%	合計	52	100%

《設問項目》	
1-1	博物館に行ったことがありますか。(ある・ない)
2-1	博物館資料の材質で知っているものはありますか(思いつくものを列記)【複数回答可】
2-2	現時点で興味を抱いている資料(分野)はありますか。【複数回答可】(以下に○)
2-2	現時点で興味を抱いている資料(分野)はありますか。《その他》【複数回答可】(以下に○)
2-3	資料が劣化・損傷している状態をみたことがありますか。(ある・ない)
3-1	博物館での資料保存の取り組みについて知っていることはありますか(思いつくものを列記)【複数回答可】
4-1	本講義のテーマの内、関心のあるものはなんですか。【複数回答可】(以下に○)
4-2	学外の博物館で収蔵庫等の見学機会があれば、参加したいと思いますか。(行きたい・行きたくない・わからない)

II. 選択回答項目

1-1	計	2-2【複数回答可】	計	2-3	計	4-1【複数回答可】	計	4-2	計
ある	52	文書	19	ある	31	保存の制度	12	行きたい	42
ない	0	日本画	20	ない	16	資料の材質	16	行きたくない	0
無答	0	洋画	23	無答	5	資料の調査	21	わからない	10
合計	52	彫刻	12	合計	52	資料の保存修復	29	合計	52
		刀剣	18			資料の輸送/梱包	11		
		甲冑	12			日本の伝統的保存法	20		
		染織品	7			博物館の環境管理	11		
		陶磁器	6			博物館と災害	7		
		漆器	4			歴史的建造物の保護	24		
		写真	8			自然環境の保護	9		
		民俗資料	11			わからない	4		
		考古資料	20			その他()	0		
		自然史資料	6			無答	2		
		歴史的建造物	25						
		自然保護区	11						
		ない	1						
		その他()	3						
		無答	0						

III. 記述回答設問項目(数字は人数。項目は類推して類別。)

2-1: 博物館資料の材質で知っているものはありますか(思いつくものを列記)【複数可】/無答数: 17
有機物: 2、木材(木造建造物、版画): 27、紙材(和紙、楮、卷子本): 26、漆: 4、縄: 2、布: 9、綿: 4、麻: 2、絹: 2、カンヴァス: 2、骨: 3、貝: 1、毛皮: 1、生体標本(?): 1、プラスチック: 2、ホルマリン: 1、炭素: 1
無機物: 2、土(粘土、ハニワ、陶器、磁器): 21、石材(宝石、鉱物、化石): 18、顔料: 1、ガラス(ステンドグラス): 4、金属: 8、鉄: 12、銀: 3、銅: 12、青銅: 10、鉛: 2、ブリキ: 1、よく知らない: 1
2-2: 現時点で興味を抱いている資料(分野)はありますか。《その他》【複数可】(以下に○、複数回答可)/無答数: 49
盆栽: 1、着物: 1、西洋建造物: 1
3-1: 博物館での資料保存の取り組みについて知っていることはありますか(思いつくものを列記)【複数可】/無答数: 21
温湿度管理: 10、照明: 8、空調: 3、有害生物管理(IPM、虫干し、防腐剤、薬剤を避ける): 3、収蔵庫(特別収蔵庫): 2、展示設備(ケース): 3、取扱い(手袋、慎重さ): 4、輸送: 1、台帳管理: 1、二次資料化(拓本、レプリカ): 3、保存処理(冷凍保存、真空保存、エンバミング): 3、史跡・建造物の修理(解体、剥ぎ取り): 2、修復(再塗装、劣化箇所の補修): 2、専門家(学芸員): 1、分かりません: 1

●FD アンケート結果 (7月12日実施。数字は「本授業」。n=45)

◆選択回答

問1:履修して良かったか?

はい:84%、いいえ:0.0%、どちらともいえない:15.6%

問2:どの程度出席したか?

100%:57.8%、~80%以上:40.0%、~60%以上:0.0%、~40%:2.2%、~20%:0.0%、~0%:0.0%

問3:1時限についての予習等時間

4時間~:0.0%、3時間~:0.0%、2時間~:4.4%、30分~:13.3%、ほとんど行っていない:66.7%

問4:履修して感じたこと

知識が身についた	75.6%
スキルが身についた	6.7%
基礎力がついた	13.3%
思考力がついた	15.6%
判断力がついた	4.4%
新しい発見があった	40.0%
進路選択に役立った	11.1%
苦手を克服できた	0.0%
知的興味が満たされた	28.9%
知識意欲を刺激された	20.0%
楽しく受講できた	13.3%
教員の専門分野に興味をもった	4.4%
この科目の関連分野に興味を持った	13.3%
早い学年で履修したかった	2.2%
遅い学年で履修したかった	2.2%
特によかったところはない	2.2%

問5:授業の進め方

授業目標が明示されていた	51.1%
目標達成のための授業構成が適切であった	20.0%
目標を達成できた	13.3%
成績評価基準が明示されていた	37.7%
授業難度が適切であった	28.9%
授業速度が適切であった	28.9%
教材・配布資料が適切であった	42.9%
宿題は役に立った	0.0%
教え方がわかりやすかった	26.7%
1回ごとの時間配分がよかった	20.0%
学生間の交流があった	0.0%
モチベーションを高める工夫がなされていた	2.2%
質問しやすかった	8.9%

◆自由記述

問1:履修してよかった「はい」

- ・身近なところから博物館学的なことまで、幅広い知識を教えていただいた。
- ・これまで詳しく知らなかった資料の保存法を学べた。
- ・さまざまな知識が身につきました。
- ・資料保存について、様々な面から知ることができました。
- ・学芸員に必要な知識が得られた。
- ・知識が深まった。
- ・博物館における「保存」がよくわかったと思う。
- ・考えれば当たり前であるはずの「保存」について、気づくことができました。
- ・プリント・口頭の説明だけでなく、実物をみたり、触れたりする機会もあり、理解しやすかったから。
- ・レジュメが丁寧で、勉強しやすい。
- ・単位を出席してればくれるから。ありがたい。

問2:履修してよかった「いいえ」

《回答なし》

問3:履修して感じたこと

- ・プリントのどの部分とパワーポイントが対応しているかわからない時が多く、困ることがあった。
- ・「移り変わっていく」内容を見ていくことで、その活用の仕方などを考えることができたと思う。毎度質問にリアクションがあるもよかった。
- ・パワーポイントも見やすかった。

問4:授業の進め方

《回答なし》

問5:授業をよくするための改善点

- ・特になし。
- ・特になし。
- ・改善すべきところはありません。
- ・プリントの行間をあけるべき。
- ・しゃべりかたがはきはきしていればよかった。
- ・パワーポイントの内容を写す時間がもうすこし欲しい。
- ・配布資料とパワーポイントの内容を一致したものにしてほしい。

15回の授業は、長年、展示会社に勤務し企画・設計・制作の実務に携わってきた経験の中から、今年の春に出版した「博物館展示理論と実践」を教科書にして、その中からこれだけは知っておいてもらいたいと考える内容を組立てて授業を行なっています。そして、展示は言葉だけでは分かり難いために多くの実例写真を見てもらい理解を図るようにしています。

授業の概要は、最初の授業でオリエンテーションを行い、15回の授業をどのような内容の構成で、どのようなことを知ってもらいたいかを話し、成績評価は、出席率と授業態度、博物館展示見学後に提出するレポート、最終日の試験の3つによって評価することを伝えています。

授業の最初は、日本におけるディスプレイ略史を概観し、古代からディスプレイがどのような面で使われ発展してきたか、特に近世以降、近代・現代の商品経済及び文化の発展の中で、商品系展示から学芸系展示が分かれて、博物館展示が誕生し、今日の博物館展示があることを理解してもらいます。そして、現代の博物館展示にはどのような類型があるかを知り、新しい展示の類型が生まれつつある事例を学び、今後の展開の可能性を考えるようにしています。

次に博物館展示を考える際のソフト面とハード面の考えるべき項目を取り上げて学んでももらいます。ソフト面で最も重要な作業は展示シナリオの作成であり、展示シナリオを作成するときの学芸員の役割は、取り上げるテーマ、そこで伝えたい「目的・ねらい」そして、吟味された資料の選定であることを伝えています。それらを分かりやすく伝える展示技術の面は、展示の専門家（展示プランナー、デザイナー）との協同作業によることを理解してもらいます。世間でよく展示業者のカラーが云々されますが、展示専門家任せにせず、オリジナリティを生み出すのは学芸員だという自覚をはっきり認識し、最終的な決定を行うための知識を学んでももらいます。

具体的に知っておくべき主な知識は、観覧者の展示室での移動（動線計画）、視線を誘導する視線計画など、物理的条件、心理的条件の抑えるべき項目を学ぶようにします。一方、ハード面は展示空間における床・壁・天井のあり方、設備（電気・空調・防災・防犯）のあり方、そして解説パ

ネル、模型、ジオラマ、映像など、どのような展示技術を選べばよいかを、その特徴と効果を知ることによってソフトを的確に伝えられる方法を学びます。

さらに展示レベルの高い表現技術として「展示の芸術性」「物語性」「共感と感動」の3つの重要な展示方法の効果を学び、そのためにはどのようにすればよいか理論と事例から学び考えさせます。

貴重な資料の保存と展示方法も重要な授業項目です。材質の違う各種の美術工芸品の保存と展示方法については、学芸員として予備知識として知っておくべき主なものを取り上げて伝えるようにしています。

また、展示照明と保存科学も重要な知識ですので、十分理解できるよう詳しく説明するようにしています。(光源による劣化、物の材質の劣化に影響の大きい照度基準)併せて、展示にとって照明は重要な役割を持ち展示効果を大きく左右する不可欠な構成要素ですので、「実物資料の色を正しく美しさを引き出す照明のあり方」「劣化を最小限にとどめる方法」「光による演出方法」「ライティングテクニックの知識」の4点について詳しく学ぶようにしています。

多くの写真事例を示しながらの授業は、学生の反応も大きく教育成果に結びつくものと考えています。毎回の授業終了時に5分間の時間を与えてコメントや質問を書かせる方法を取り、内容の理解の把握と質問には詳しく説明し、コミュニケーションのひとつとして大事にしています。

新カリキュラムによって展示学を学ぶ時間が加わったことは大きな前進だと思います。しかし、授業を行なって課題だと思うことは、半期の15回の授業では十分ではないということです。通年30回の授業であれば、前半で理論を学び、後半で実践として学生に展示企画を考えさせ、実務に近い学習が学べるだろうと思われれます。

法政大学学芸員課程設立50周年記念シンポジウム

シンポジウムⅠ
「新カリキュラムの実践と課題」
博物館教育論

菅井 薫

1

1. 授業の概要

- 博物館研究／博物館学における、博物館教育に関する**基本的理論**の講義・解説
- 博物館の具体的な教育活動を取り上げ、活動の理論的／実践的意味を考える。


【授業方法】
教員による講義（スライドや映像を使用）とフォローアップ、受講生による発表／グループワーク

「書く」＞「話す」＞「聞く」

2

2. 授業で工夫した点

- できる限り、博物館教育を実体験できる機会をつくれるよう、博物館が開発した**教育ツール**を使ってもらい改善点を洗い出す、開示可能な**企画書（起案書）**を解説するといった時間を設けた。



3

暮らしの道具 少巻

1. 調理する



4

2. 授業で工夫した点

- 学芸員課程の他科目との関連について触れる。

【背景】
博物館教育論が設置された初年度から、「博物館と教育がどういった関係があるのか」疑問が多く寄せられた。

5

3. 学生の反応や教育成果

- 教職科目と学芸員課程科目の両立に悩む受講生がいた。教員となって博物館利用をしたいと考える大学院生がゲストスピーカーとしてお越し下さったことで、自分の学び方を相対化し、再構成したいと考えるようになったと報告をしてくれた。

6

3. 学生の反応や教育成果

- 博物館学ないしは類する専門領域に関心のある受講生が、自主的に授業外での学びの機会や実践の機会を求め、参加してくれた。

7

4. 授業上の評価と課題－1

- 学芸員資格はとりあえず取得するが、学芸員になることは難しいとの現状（情報）から、受講のモチベーションが高まりにくい様子が強く感じ取られる。教員側も学芸員養成か理解者養成かという二項対立のロジックにとらわれない授業づくりが必要とされていることを痛切に感じる。

8

4. 授業上の評価と課題－2

- 大学と博物館の不幸な出会い
例) インターンシップの学生を受けいれられど...
人材育成<労働力
・・・アルバイトと何が違うのか？
博物館実習を受け入れようとするが...
「大学の先生に言われたので来ました」

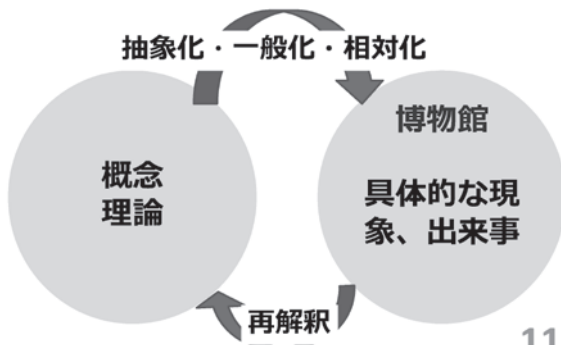
9

4. 授業上の評価と課題+α

- 大学と博物館の不幸な出会い
「いきすぎた現場至上主義」
○○では・・・、現場では・・・
現場を経験した人でないと語りえない？
→大学で学ぶべき、大学だから得られる学びとは何なのか？
を考えて、学芸員資格課程の授業を構成していかなければならない。

10

大学で学ぶべき、大学だから得られる学びとは何なのか？



11

1. 授業の概要

博物館研究／博物館学における、博物館教育に関する基本的理論を解説する。その上で、博物館の具体的な教育活動を取り上げ、活動の理論的／実践的意味を考える。授業の方法は、原則として教員による講義（スライドや映像を使用）とフォローアップ、受講生による発表／グループワークからなる。

2. 授業で工夫した点

- できる限り、博物館教育を実体験できる機会をつくれるよう、博物館が開発した教育ツールを使ってもらい改善点を洗い出す、開示可能な企画書（起案書）を解説するといった時間を設けた。
- 昨年度は、博物館でボランティア活動を行っている社会人と大学院生にゲストスピーカーとなって頂いた。受講生の中にも博物館でボランティア活動を行っている学生が数名おり、活動内容の簡単な発表とコメントなどをお願いすることがあった。今年度は、科学館の科学コミュニケーターにゲストスピーカーとなって頂いた。授業内容とも関連のある、教育プログラムのつくりかた、人材養成の観点からお話をして頂いた。あわせて、受講生には発想法を用いて、実際に企画を出すためのアイデア出しを実体験してもらった。
- 博物館教育論が設置された初年度から、「博物館と教育がどういった関係があるのか」疑問に思う学生が多く見られた。そのため、学芸員課程の他科目とどのように関係してくるのか、初回の授業と授業の各回で触れるようにした。

3. 学生の反応や教育成果

- 教職科目と学芸員課程科目の両立に悩む受講生がいた。教員となって博物館利用をしたいと考える大学院生がゲストスピーカーとしてお越し下さったことで、自分の学び方を相対化し、再構成したいと考えるようになったと報告をしてくれた。
- 昨年度は、博物館学ないしは類する専門領域に関心のある受講生が、自主的に授業外での学びの機会や実践の機会を求め、参加してくれた。

4. 授業上の評価と課題

- 学芸員資格はとりあえず取得するが、学芸員になることは難しいとの現状（情報）から、受講のモチベーションが高まりにくい様子が強く感じ取られる。教員側も学芸員養成か理解者養成かという二項対立のロジックにとらわれない授業づくりが必要とされていることを痛切に感じる。

「博物館経営論」担当

杉長 敬治

1

宮本常一のモットー

**歩く・見る・聞く
& 記録する
& 考える**

2

○授業実践の基本的姿勢

1 受講生の実態を踏まえた授業展開

○博物館体験についてアンケート調査
初回の授業時に実施
調査の結果、受講生の多くは1年生、博物館経験が少なく、博物館や博物館の経営にリアルな認識はもっていない

○講義の目標
第1の目標: 博物館体験を増やし、博物館にリアルな認識をもつ
第2の目標: 多くの資料、最新の統計データを活用して、博物館と博物館を通して見えてくる日本の社会について、自分の眼で見て、自分の頭で考え、考えたことをプレゼンする

その他の目標: 受講時に学芸員になることを考えていない者も一定程度いることから、社会生活をおくる上で汎用性のある知識であるマーケティングの基本を修得

3

博物館体験の状況についての調査項目

- ① 前年度の博物館の利用回数
- ② 前年度に訪問した博物館のうち最も印象に残った館名、その理由
- ③ お気に入りの博物館の有無、ある場合は館名、有無それぞれの理由
- ④ これまでの博物館経験の状況
親等が博物館に連れていってくれたことの有無
学校での博物館体験の状況

4

2 講義型の授業を基礎に、受講生の自発的な学習を促す工夫

○受講生の疑問からスタート
大学で用意されている「出席表」に質問・コメントを書くことを奨励し、質問は次回の講義の素材にして、丁寧に回答

○受講生のもつ多様性を相互確認
受講生のコメントも適宜紹介し、多様なコメントがあることを実感してもらう。

○講義内容を踏まえた自己学習の促進
講義内容に沿った課題を毎回提示し、受講生にレポートを提出してもらっている。
分量 A4版1枚程度(超えることも可)、
テーマ 多くのテーマから選択、博物館訪問レポート
提出回数 6回

5

受講生のコメント

博物館に行く時には、トイレや休憩場所を気にしてみたい	博物館におけるマーケティングの重要性、職員がマーケティング意識を持つことが重要。	マーケティングは慎重に考え、バランスをしっかりと見ていく必要がある。
STPという手法を初めて知った。	博物館の入館料が2千円以上、少し高すぎると思う。	博物館のマーケティングが企業と変わらないのには驚きました。公立館の民間委託も理解できる。
ドラッカーを読みます。多くの経営戦略を学びたい。	マーケティング	みんなに来てもらうのではなく、特定の人にターゲットを絞るマーケティングをしたい。
近所にスタバとドトールが並んでいる。ターゲットの違いがあるから潰れないのでしょうか。	ターゲットング、マーケティング、4P、4Cを学んでマーケティングをしたくなった。「ぐるっとバス」のような存在をもっと知ってもらう必要がある。	博物館じゃ、いい意味で企業化していくことで、マーケティングの成功に繋がるのではないか。
全部の層にターゲットを当てることは無理。館外の環境づくりが重要だ。	明確な目標をもった行動が重要	博物館はこうあるべき! だなどというのではないと思った。
ターゲットの幅が曖昧になると、良いコピーはできない(コピーライター)。	古く歴史のある博物館が好きであったが、今までの概念を超える博物館が必要だと思った。「博物館はこうあるべき」だなどというのではないと思った。	

6

受講生のコメント		
STPや4Pを考えるのは、非常に難しい。 単にものを売るのではなく、サービスを含めたものを売る	スターウオーズ、新しいものに触れる点で良い機会。展示方法には改善の余地が十分ある。	新しい来館者層の開拓が必要。 高校生の獲得は難しそう。
小さな博物館ほどマーケティングは重要なのではないか。	アニメや漫画を博物館で展示することが批判されていたことに驚いた。	マーケティングは慎重に考え、バランスをしっかりと見ていく必要がある。 +αのサービスが居心地の良い空間を作る。
博物館のプロダクトの範囲は広がっていると感じた。プロダクトの範囲を広げることにより、入館者数が増えたのか気になる。	マーケティング 新規開拓が必要	僅かな差異が売上増につながる。
マーケティング＝創客におけるトレードオフ(年配と若者)、展示品以外の雰囲気作りも重要な要素である。	スターウオーズ、ジブリは集客の面で良い経営戦略である。NHKの番組で取り上げたダイオウイカも、国立科学博物館で展示がある。	人や物を相手にするマーケティング論は新鮮。
カフェ・レストランを併設する美術館 新美術館で実感	ルール美術館の様々な種類のバス、売り込みポイントになるのかな。	博物館の理念は、マーケティングの観点から見ると堅すぎるのかもしれない。博物館の理念を再考する必要があるかもしれない。

番号	課題レポートテーマ一覧
1	受講生の「博物館体験」の結果を見て感じたこと
2	博物館の使命(ミッション)を調べて、コメント
3	日本の博物館の経営資源についてどのような現況にあるか、何が課題か考察
4	海外の博物館10館の最新の入場料を調査
5	公立博物館の収支状況、経費に占める自己収入の割合を調べ、コメント
6	博物館の評価結果を調べ、コメント
7	ICOM倫理規定と博物館の原則(日本博物館協会)を読んで、コメント
8	映像「文化財の危機」についてのコメント
9	東日本大震災等の災害と博物館についてコメント
10	訪問した博物館等でマーケティングの観点から見て注目すべき事項を紹介・コメント

番号	課題レポートテーマ一覧
11	博物館のチケット、会員制度でユニークなものをレポート
12	博物館の広報戦略でユニークなものをレポート
13	博物館の連携方策でユニークなものをレポート
14	独立行政法人の国立博物館の中から1館選んで、中期目標、中期計画についてレポート
15	出身・居住地域にある博物館の指定管理者制度の導入状況をレポート
16	地域の中で存在感を発揮する公立博物館についてレポート
17	私の好きな私立美術館についてレポート
18	私の好きなミュージアムショップについてレポート
19	私の好きなミュージアムグッズについてレポート
20	私の好きなミュージアムのレストラン・カフェについてレポート
21	訪問した博物館で「創意工夫があるな」と感じた博物館についてレポート

3 期末に提出する課題による学習目標の達成
 期末に提出するレポートを、3項目から選択してもらっている。
 <ねらい>
 ・博物館体験を深化
 ・基礎学力(リサーチ力、文章力、プレゼン力)を養成する。

①博物館の経営分析 (A4版5～10枚程度)
 ②博物館人に向けての自己改造を図るための「まるごと1冊」スクラップ! (ノート1冊)
 ③ブックレビュー (1冊の場合3,000字、2冊の場合各1,500字)

※全課題では1万字を超える文章を書くことになる。
 読ませる文章を書く者、優れたプレゼンをする者が多数いる。
 半年間で能力は向上する。

博物館体験の調査結果の概要

回答者の属性 所属学部・男女・学年

学部名	男性	女性	総計
文学部	13	15	28
大学院		2	2
キャリアデザイン学部	1	4	5
人間環境		4	4
国際文化学部		3	3
法学部	1	1	2
総計	15	29	44

学年区分	人数
学部1年生	31
学部2年生	9
学部3年生	1
学部4年生	1
大学院	2
総計	44

博物館訪問回数 学部別		博物館訪問回数 学年別	
学部名	平均回数	学年	平均回数
キャリアデザイン学部	6.70	1年生	1.26
国際文化学部	2.67	2年生	6.50
人間環境学部	3.25	3年生	2.00
大学院	12.00	4年生	6.00
文学部	1.71	大学院	12.00
法学部	1.50	総計	2.94
総計	2.94		

13

博物館訪問回数 学年別						
訪問回数	1年生	2年生	3年生	4年生	大学院	総計
0	13					13
1	6					6
2	6	1	1			8
3	4					4
4	1	2			1	4
5	1	2				3
6				1		1
7		3				3
17.5		1				1
20					1	1
人数	31	9	1	1	2	44
平均訪問数	1.26	6.5	2	6	12	2.94

14

博物館訪問回数 (男女別)			
訪問回数	総計	男性	女性
0	13	6	7
1	6	3	3
2	8	3	5
3	4	1	3
4	4	1	3
5	3		3
6	1	1	
7	3		3
17.5	1		1
20	1		1
平均	2.94	1.47	3.71

15

○授業実践の基本的姿勢

1 受講生の実態を踏まえた授業展開

初回の授業時に、受講生の博物館体験の状況（質問項目は下記①～④）についてアンケート調査を行い、その結果を踏まえて講義をしている。受講生の多くは1年生で、直前まで高校生・受験生だった者が多い。博物館経験が少ないままでは、博物館や博物館経営にリアルな認識をもつことは難しい。このため、博物館体験を増やし、今日の博物館にリアルな認識をもつことを第一の目標に講義している。多くの資料、最新の統計データを活用して、博物館と博物館を通して見えてくる日本社会について、自分の眼で見て、自分の頭で考える姿勢をもつことを第二の目標にしている。一方で、受講時に学芸員になることを考えていない者も一定程度いることから、社会生活をおくる上で汎用性のある知識であるマーケティングの基本的概念の修得も、目標にしている。

- ① 前年度の博物館の利用回数
- ② ①のうち最も印象に残った博物館名、その理由
- ③ お気に入りの博物館の有無、ある場合は館名、有無それぞれの理由
- ④ これまでの博物館体験の状況（親等が博物館に連れていってくれた経験の有無、学校での博物館体験の状況）

2 講義を基礎に、受講生の自発的な学習を促す工夫

大学で用意されている「出席表」に質問・コメントを書くことを奨励し、質問には丁寧に回答するよう心がけている。受講生のコメントも適宜紹介し、多様なコメントがあることを実感してもらっている。

講義内容に沿ったテーマを毎回提示し、受講生にレポート（課題レポート）の作成をしてもらっている。

（分量 A4版1枚程度（超えることも可）、提出回数 6回）

3 期末に提出する課題による学習目標の達成

受講生には、課題レポートの他に、期末にレポートを提出してもらっている（下記の3項目から選択）。博物館体験を深化させるとともに、基礎学力（リサーチ力、文章力、プレゼン力）を養成する。

- ①博物館の経営分析（A4版5～10枚程度）
特定の博物館を選び、当該館の経営上の課題・問題点を分析し、課題・問題点の解決策を提言
- ②博物館人に自己改造を図るための「まるごと1冊」スクラップ！
自らを博物館人に改造することを目標に、新聞等の博物館に関する記事をスクラップし、コメントを付していく。
授業期間中の博物館訪問等自己の博物館経験を記録してもらっている。
- ③指定文献のブックレビュー（1冊の場合3,000字、2冊の場合各1,500字）
※受講生の中には、1万字を超える文章を書く者がいる。書く方も読む方も真剣勝負！
文章の執筆やプレゼンテーションに高い能力を発揮する者が多いこと、半年で能力が高まる者がいることを確認。

○課題

1 学芸員になれる可能性が極めて低い中での学芸員養成の課題（養成施設を超える課題）

我が国では学芸員として就職できる者が極めて少ない中、受講生の努力が社会においてどのように活用されるのか、十分な見通しがない状況がある。意欲と能力のある者には、学芸員としてのキャリアを形成する途が見えてくるような態勢の構築が期待される。科目数の増大により、学芸員養成にかかるコストは大きくなった。毎年約1万人が払うコスト、これをどう評価し、役立てるのか！？

2 非常勤講師が多い体制下での工夫（養成施設の課題）

法政大学でも多数の非常勤講師が関与している。他大学でも同様と思う。金山学部長の努力により、専任教員と非常勤講師が一同に集まって、授業の進め方等について協議する場、お互いを認知する場が設けられた。更にシンポジウムの開催に至ったことは意義がある。個々の教員レベルだけではなく、全教員レベル、大学レベルの取組の進展が、教育効果をあげるために必要不可欠である。

田尻美和子／博物館情報・メディア論（春学期）、博物館実習Ⅱ（通年のうち春学期）担当**▼授業の概要**

博物館情報・メディア論では、「博物館における情報の活かし方を考える」をテーマに、情報の整備・提供・活用に関して、多様なテーマから説明。市町村規模の博物館の現状と課題も取り上げる。将来、博物館に関連する仕事を志す者に対しては、博物館情報の提供と活用に関する基礎的能力を身に付けることを目指す。また、博物館における情報の活用方法などミュージアム・リテラシーを高めることも目標の一つにとらえている。

博物館実習Ⅱでは、企画展開催までのプロセスを、博物館の実際の体験をもとに説明。さらに、グループワークによって各々が選んだテーマに基づいた企画展の企画を体験する。博物館展示の歴史や展示メディア、展示企画の実態をふまえ、企画展の構想、立案、展示計画、資料借用、情報提供など学芸員が関わる展覧会開催までのプロセスを学び、企画展開催の基礎的能力を養う。

▼授業上で工夫した点

○グループワークの重視…メディア論は講義中心の授業だが、グループワークを2度行った。展示図録の見方と、資料記述の体験。学生に、ドキュメンテーション（資料記述）の大切さについて特に伝えたかったため。また博物館実習Ⅱでは、授業の約半分をグループワークにあてているが、一つの企画展の企画を現場の学芸員と出来る限り同じプロセスで追体験してもらうように工夫している。例えば、企画展開催会場に関する条件を与える、発表は実際の学芸員同士の企画会議のように、質疑応答を重視し、それに対する企画の修正や改善をしてもらうなど。

○出席カードへの感想や質問の重視…メディア論、博物館実習Ⅱともに、出席カードには質問やコメントを書いてもらい、積極的に次の授業で回答するようにした。そのためか各回質問が大変多く、10人以上の質問に答えることもあった。これによって他の学生の関心を喚起することができる。また、指導する側にとっても新たな授業の素材や気づきを得る機会となった。

○学芸員の実務を積極的に紹介…テキストや机上の理論にとらわれず、実際に学芸員が現場で置かれている状況や、その際にどう対処するかなどの話題を多く取り入れた。

▼学生の反応や教育成果

受講人数の都合上、個別に面談する時間は取れないため出席カードが主なコミュニケーション手段だが、質問やコメントからは、最初の数回の授業によって徐々に理解度が増していく様子が見られた。また、特に今年度は、授業の内容を元に自ら考えたり、発想をしたりする様子がうかがえ、手ごたえを感じられた。

メディア論では、現地見学（取材）に基づく長文レポートを課題としている。ここで、熱心な学生は、現地見学の講座の時間よりもかなり早くから来て、職員にきちんと質問をしたり、じっくりと施設を見学したりする。また、課題の意図もよく理解をしてレポートを作成している。これをなるべく多くの学生に浸透させていくようにしたい。

▼授業上の評価と課題

- ・学生の理解度をチェックしたり、学生の反応をよく見ながら授業をすすめること。
- ・講義内容や課題の意図（Why important?）を学生に十分理解してもらうこと。
- ・博物館学芸員、あるいは博物館のスタッフとなった時に、自ら考え行動できる人材を育てられるかどうか。
- ・学生が、授業を通して学んだことを、博物館界への就職を含めてひろく自らのキャリアの中で活かせるか。